東大寺諷誦文稿注釈〔五〕

——168行～231行——

小林　真由美

凡例

【影印】

昭和十四年刊複製本『華厳文義要決　東大寺諷誦文稿』（佐藤達次郎刊）の「東大寺諷誦文稿」を撮影した。上部に、築島裕編『東大寺諷誦文稿総索引』（平成十三年、汲古書院）による行番号を記した。

【翻刻】

翻字は、『東大寺諷誦文稿総索引』の本文翻刻に準拠する。但し、旧字体・異体字・略字は原則的に現行の新

字体にあらためた。但し、「无」「寶」「珎」「尓」「旦（檀）」はあらためなかった。片仮名の上代特殊仮名遣い甲類のコは「古」、乙類のコは「己」、ア行のエは「衣」、ヤ行のエは「エ」、ワ行のエは「ヱ」と表記した。

○内の算用数字は、本文に引かれた連絡線に付けた番号である。→は連絡線の始点を、←は連絡線の終点を示し、①→　←①が一本の連絡線を示す。

□　＝欠損や擦消などにより解読不能の文字。

〔　〕＝解読困難または解読不能だが、先行書の解読によって挿入する文字。

「　＝章段の文頭を示すと思われる鉤点。

□・○＝廓（囲み線）で抹消された文字。

翻刻の行頭の数字は、行番号を示す。

【読み下し文】

翻字、記号等は、【翻刻】に準ずる。連絡線で挟まれた部分は、（　）の中に入れて連絡線の番号を記した。例えば、連絡線⑫で挟まれている部分は、（①釈迦如来を…）とした。連絡線が入れ子になっているときは、外側を【　】にいれ、【①釈迦如来を…（②薬師如来を…）】とした。別案と思われる語句は／で示した。

【文意】

主に現代語訳であるが、適宜補足や省略をおこなっている。連絡線は【読み下し文】と同様に表記する。

【語注】

行頭の数字は、『東大寺諷誦文稿総索引』による行番号である。掲出語句と順番は【読み下し文】による。

「中田書」は、中田祝夫『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』の略。『総索引』は、『東大寺諷誦文稿総索引』の略。「築島「小考」」は、築島裕「東大寺諷誦文小考」（『国語国文』第二十三巻第五号、一九五四年五月）の略。

本稿は、博士論文「平安初期仏教と文学の研究―『日本霊異記』と『東大寺諷誦文稿』―」付録「東大寺諷誦文稿注釈」に加筆修正したものであり、次の注釈の続稿である。

「東大寺諷誦文稿注釈〔一〕―1行～40行―」（『成城国文学論集』第三十六輯、二〇一四年三月）

「東大寺諷誦文稿注釈〔二〕―41行～79行―」（同、第三十七輯、二〇一五年三月）

「東大寺諷誦文稿注釈〔三〕―80行～122行―」（同、第三十八輯、二〇一六年三月）

「東大寺諷誦文稿注釈〔四〕―123行～167行―」（同、第三十九輯、二〇一七年三月）

『東大寺諷誦文稿』複製本の影印に関して、原本旧所蔵者であり複製本の刊行者である佐藤家よりご快諾を賜りましたことに心より御礼申し上げます。

179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168

慈悲德

道伏匍匐亦拯拔无久目所腫合大小便利蟲所呂洗

鼻嚊往還人掩面鼻逃仏至彼所自洗

者如是慈悲至深貧賤人除父母餘人見如犬馬仏不

大空然見貧宣我子救済見五戒宣我父衰愍

稱名恩德廣世間最尊親衆豊山浄

三千世界獨一出現某仏来収五三界為我有拯育四生為吾子

誘古之乃至世中預御子乃列我貯容汝等貯乃佳等

无量劫中捨国城妻子之財為汝等作床座求法

為汝等某仏不出現世間依何奉某経何世奉報某仏御恩

荷負南府何奉酬砕骨髄何奉報為人一切起慈如大空須弥山

為鼓虫興悲如大空四大海貴我某仏雖人尤蒙某仏御恩

180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190

至寺思惟方是此善人住處我何時棄世俗家住如来家依是思惟自然得出家功徳云人身力強壮時誘僧瑕疵附身時妻子不扶

僧文着衣晝夜不離着病讀経乞擔碎身力竭心魂不寝不守扶不尋雨風乞策杖着山嵩谷不休親族不捨妻子故不懐僧

妻子何救地獄眷属何引浄土僧乞乞度救地獄合生天乞合生浄土

何故墓仏久出三界火宅坐衣不三界図維摩詰現病相久離八苦坐

観世芽遇去仏坐更作芽地蔵芽花地獄何即一切衆生赤脫三界図是故仏入三界図一切衆生出三界図仏

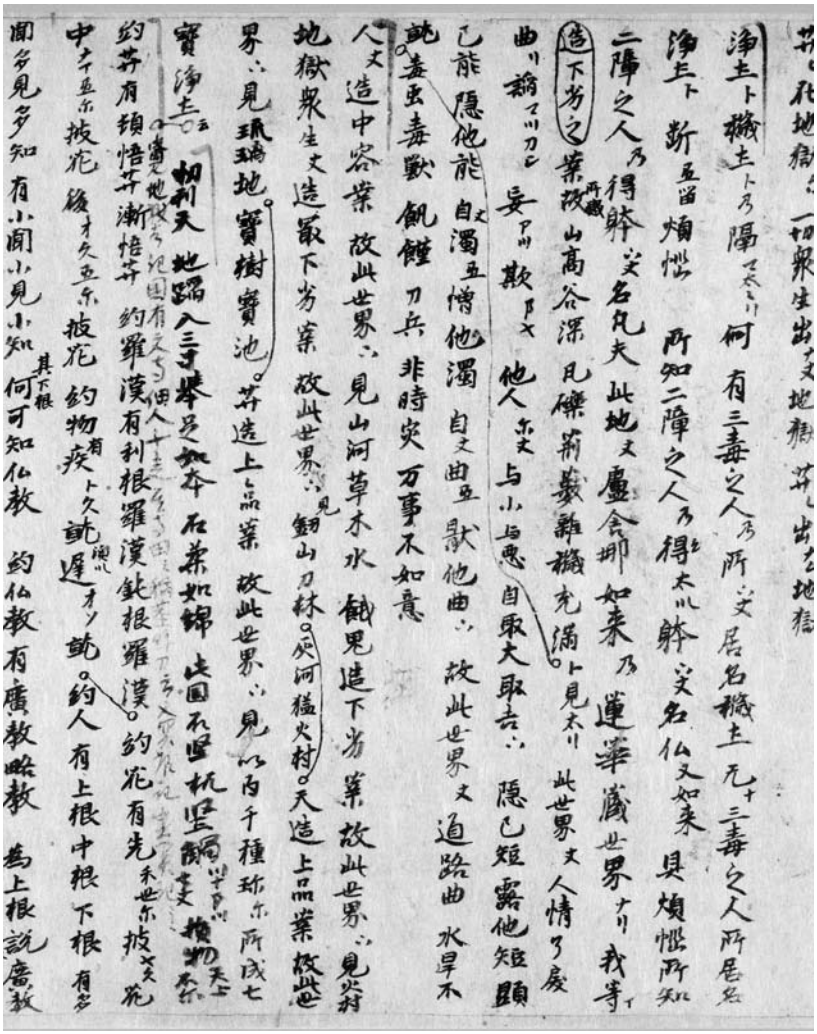
出乞乞三界図一切衆生病演此故芽為病一切衆生病也芽乞病也一切衆生

不成仏故大悲芽不成仏一切衆生成仏芽成仏一切衆生因已成地獄故

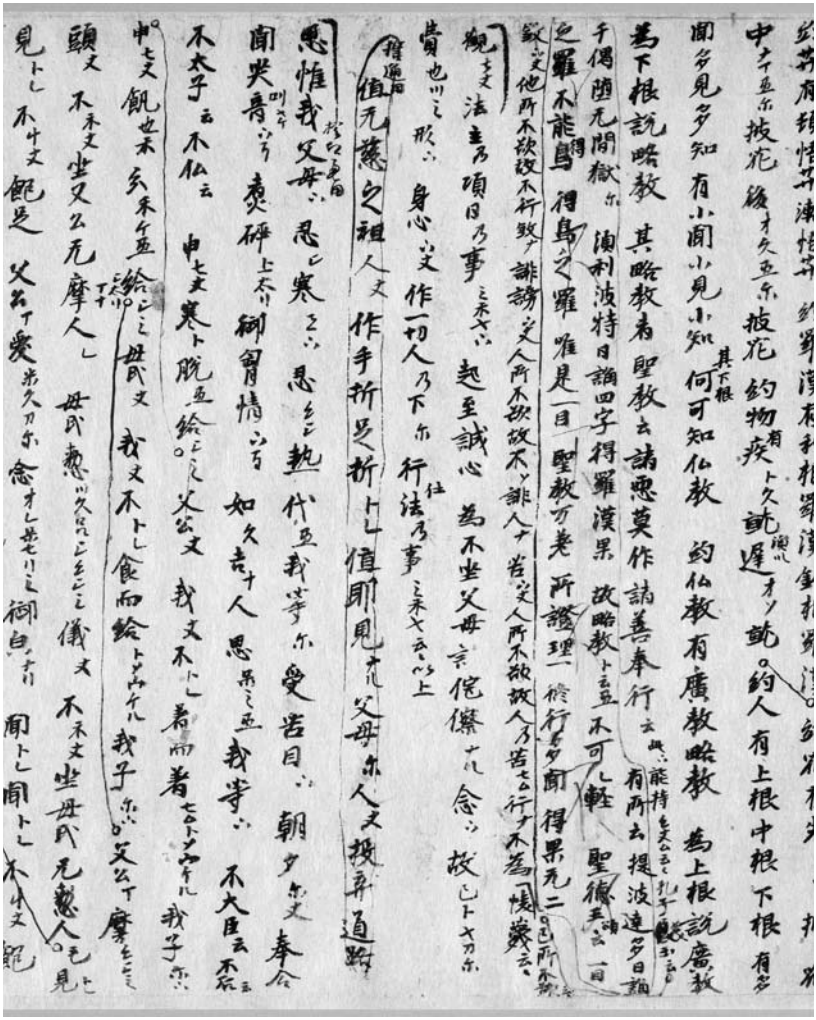
芽花地獄一切衆生出地獄芽出乞地獄

浄土ト穢土ト乃陽何有三毒之人乃所居居名穢土元三毒之人所居名

203 202 201 200 199 198 197 196 195 194 193 192 191 190

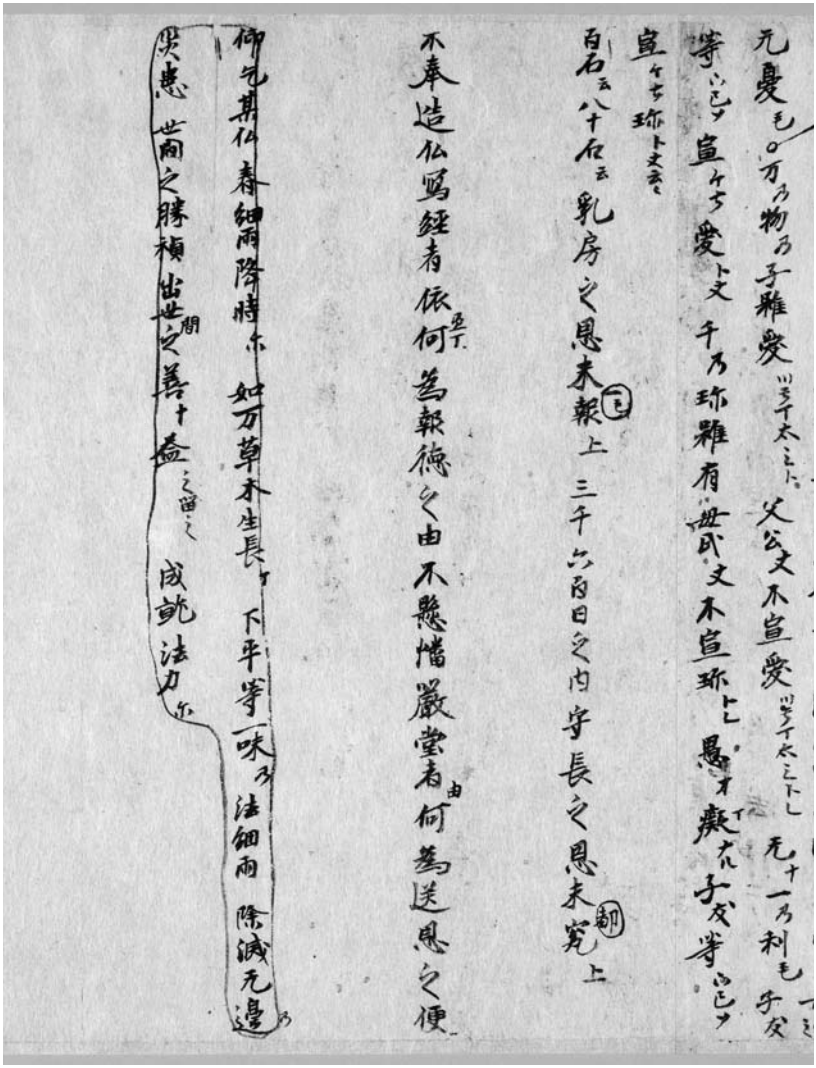


216 215 214 213 212 211 210 209 208 207 206 205 204 203 202



226 225 224 223 222 221 220 219 218 217 216 215

頭又不未又坐又公无摩人し　母氏悲久ハ　儀又不未又坐母氏无悲人毛見
見トし不ナ又飢足　父公ノ愛ル久ノ念オし　御白ナリ　聞トし聞トし不ナ又飢
母氏ノ我子ト云ふ　御音ナリ云　七輪摩ノ琴毛　益ル也　父公ノ悲ノ麗輪王
求衣羅　益須ナル也　母氏ノ悲厚ル也　大悲ノ芳懐為畫夜々眠所大恩南無
為朝夕々遊庭　合美慈ル　相ニ咲ト方　紅ノ美　白ル毛　合毛　見ル悲ノ毛也　櫛目ル
扣ル川ニ　背ル　何怜ト　音ル　合毛　聞ル丁毛也　鳥獣須ノ見ル又祖ル　喜ル
不ニ奉親父君　成ル留　久ノ　不ニ奉聞母氏ル　歴ル留　年月ノ　雨ニ吹
風ノ時ル毛　坐ル又父君ニ　不思物毛　露霜置ナ　可坐彩久園変ル乃　紅白ル又
由ル又ノ吾胄ル　成ル留　麻獣ル　可坐安ル恭敬ノ玉身ル又由ル又ノ我等ル　成ル
干ノ山ル　霜暁ノ雪ノル又　坐ル又父公ニ　不念物毛　降ル雨吹風時ル毛　坐ル又母氏ニ
无憂毛　万ノ物ノ子難愛ル又ノ　父公ノ不豈愛ル又ノ　无ナ一ノ利毛　子ノ
等ル　豈ル愛ト又　千ノ珠難有　母氏ノ不豈珠ト　愚ル　癡ル子ノ等ル
豈ル珠ト又



225 226 227 228 229 230 231

元憂毛〇万乃物乃子雖愛三千大千ト。父公文不豈愛三千大千トし元十一乃利毛子父
等心已ノ豈ケ方愛ト文千乃珠雖有世代文不豈珠トし愚才癡ナル子父等心已ノ
豈ケ方珠ト文云
百石云八十石云乳房之恩未報上三千六百日之内守長之恩未究上

不奉造仏写経者依何為報徳之由不懸幡厳堂者何為送恩之便

御先祖仏春細雨降時ハ如万草木生長ス下平等一味乃法細雨除滅元邊乃
災患世間之勝利出世之善ト益之留ル成就法力ハ

【翻刻】（168～173行）

168　慈悲徳

169　道ミチノヘニ　伏リ乞匃カタキ　疥ハタケ搔カキテ　无ク目所モ腫合テ大小便利坐所キトロニシテ

170　臭穢　往還人ハ掩フタキ面ヲ奄オホヒテ鼻ヲ逃　仏至彼所　自オホミテツカラ洗アラヒ

171　着給タリ　如是慈悲至深大坐　貧賤人ヲハ除テ父母ヲ　余人ハ見如犬烏　仏ハ不

172　大坐然　見貧テハヲ宣テ我子救済給フ　見テハ賤ヲ宣テ我ソ父ト　愛愍云

173　称名云　恩徳広无上云　世間最云　等視衆云　霊山浄云

【読み下し文】（168～173行）

慈悲ノ徳

道ミチノヘニ伏コヤリタル乞匃カタキハ、疥ハタケ搔カキテ目所モ无ク腫レ合ヒテ、大小便利坐所キドコロニシテ、臭ク穢ハシ。往還ノ人ハ面ヲ掩フタキ鼻ヲ奄オホヒテ逃ル。仏彼ノ所ニ至リ、自オホミテツカラ洗アラヒ着セ給ヒタリ。是ノ如ク慈悲至リテ深クオホマシマス。貧シク賤シキ人ヲバ、父母ヲ除キテ、余ノ人ハ見ルコト犬烏ノ如シ。仏ハ然オホマシマサズ。貧シキヲ見テハ、我ガ子ト宣ヒテ救済シ給フ。賤シキヲ見テハ、我ソ父ト宣ヒテ愛愍シタマフ云。

称名云。无上云。恩徳広云。世間最云。等シク衆ヲ視ルコト云。霊山浄云。

【解説】（168～173行）

▽168～173行　標題「慈悲徳」。仏の慈悲を説く。仏は道端の乞食にも貧賤の者にも等しく慈悲をかけ、わが子のように救済してくださるという。「等しく衆生を慈しむこと一子を視るがごとし」（『大般涅槃経』巻第一）という仏典に多見する表現を、和文的、口語的な文章に敷衍している。仏に対する敬語の使用が多い。

【文意】（168～173行）

道の辺に伏している乞食は、ハタケを掻いて眼の辺りも腫れて合わさり、大小便もその場でしてしまうので、臭く汚い。往来する人々は顔をおおい、鼻をふさいで逃げる。仏はその乞食の所においでになり、御手づから乞食の身体を洗い衣服をお着せになったのである。このように、仏の慈悲はきわめて深くいらっしゃる。貧しく賤しい人を、父母を除いて人々は犬や烏のように見る。仏はそうではいらっしゃらない。貧しい者を見ては我が子とおっしゃって救済される。賤しい者を見ては、私が父だとおっしゃってお可愛がりになる。

称名云。无上云。恩徳広云。世間最云。等しく衆生を見ること云。霊山浄土云。

【語注】（168～173行）

169乞匄（カタキ）　道端や家々で人に食物や金銭を乞う者。乞食。

169疥（ハタケ）　皮膚病の一種。「疥ハタケ」（観智院本『類聚名義抄』法下一一七）。

170掩（フタ）キ　104行に「塞フタキ」がある。104行語注参照。

170奄（オホ）ヒテ　「奄ォホフ」（観智院本『類聚名義抄』仏下末三四）。

170自（オホミテヅカ）ラ　本書では「オホミ」は仏に対する敬語で、ここでは「テヅカラ」の「テ（手）」に付けている。115行「青蓮の睛（オホミメ）」語注参照。

173霊山浄　霊鷲山浄土。霊鷲山（鷲峯、耆闍崛山）はインドのビハール州にある山。釈尊が『法華経』を説法した地とされ、釈迦牟尼仏の浄土とされる。

【翻刻】（174～179行）

174 ⌈三千世界ニ独一出現給タル某仏（尺）ハ　束収（弃无為之楽城住有為之壊郷）テ三界ヲ為我有物ト㉓↓　撫育テ四生ヲ為吾子

175 ↑㉓誘（古シラ）ヘテ世中ヲ預（アツ）ケ給ヒ御子ノ列（ツラ）ニ　我（アカ）財ハ皆汝等カ財ソト宣フ住昔（ノ）

176 无量劫ノ中ニ　捨テモ国城七珎（妻子）之財ヲ　為ト宣ヒ汝等カ　作テ床座求テモ法ヲ

177 為ト宣フ汝等カ　某仏不出現世（間）者　依何奉マシ某（間）経　何世奉報某仏大御恩

178 荷負両肩何奉酬　砕骨髄何奉窮　為ニ人一リカ起給タル慈スラ　如大坐須弥山

179 為蚊ハフ虫興ヘル悲スラ　如大坐四大海　貴哉某仏　誰人ソモ不ム蒙某大御恩

【読み下し文】（174～179行）

⌈三千世界ニ独リ一タヒ出現シ給ヒタル某（釈）仏ハ、无為ノ楽城ヲ弃（ス）テテ、有為ノ壊郷ニ住シタマフ。

（㉓三界ヲ束ネ収メテ、我ガ有（モ）ツ物ト為（シ）タマフ。四生ヲ撫（ヤシナ）テ育ヒテ、吾ガ子ト為タマフ。）

世ノ中ヲ誘（古シラ）ヘテ、御子ノ列（ツラ）ニ預（アツ）ケ給ヒ、我（ア）ガ財ハ皆汝等ガ財ゾト宣（ノタマ）フ。往（住）昔ノ无量劫ノ中ニ、国城、妻

子、七珎ノ財ヲ捨テテモ、汝等ガ為ゾト宣ヒ、床座ヲ作リテ法ヲ求メテモ、汝等ガ為ゾト宣フ。某仏、世間ニ出現シタマハズハ、何ニ依リテカ某経ヲ聞キ奉ラマシ。何レノ世ニカ某仏ノ大御恩ニ報ヒ奉ラマシ。荷ヲ両ノ肩ニ負フトモ、何ニシテカ酬イ奉ラム。骨髄ヲ砕クトモ、何ニシテカ窮メ奉ラム。人一リガ為ニ起シ給ヒタル慈シビスラ、須弥山ノ如クオホマシマス。蚊フ虫ノ為ニ興シタマヘル悲シビスラ、四大海ノ如クオホマシマス。貴キ哉、某仏、誰人ソモ某ノ大御恩ヲ蒙ラザラム。

【解説】（174～179行）

▽174～179行　斜線で抹消されている。内容は168～173行の「慈悲の徳」に続く。釈迦牟尼仏は唯一我々の世界に現れた仏であることを述べ、衆生に限りない慈悲をそそぐ仏の恩を讃えている。

【文意】（174～179行）

三千世界にたったお独り、一度だけ出現された某仏（釈迦牟尼仏）は、無為の楽城（悟りの世界）を捨てて、有為の壊郷（私たちの住む無常の世界）にお住まいになる。

（㉓三界を束ね収めて、我が持ち物となさる。四生を撫育して吾が子となさる。）

世の中の衆生を誘い導き、仏の御子の中にお加えになり、我が財はあなたたち皆の財だとおっしゃる。往昔、国城、妻子、七宝を捨てても、あなたたちのためにこそとおっしゃって、床座を作って法を求めても、あなたたちのためにこそとおっしゃる。

某仏（釈迦牟尼仏）がこの世にご出現なさらなかったら、私たちは何に依って某経を聞き申し上げられるだろうか。どの世で、某仏の大御恩に報い申しあげられるだろうか。たとえ荷を両肩に負うとも、どうやってこの恩を報い申しあげられるだろうか。たとえ骨髄を砕いても、どうやって報い申しあげられるだろうか。人一人のためにお起こしになる慈しみでさえ、須弥山のような大きさであられる。這う虫のためにお興こしになる慈悲でさえ、四大海のような大きさであられる。貴きかな、某仏。どんな者であろうとその大御恩を蒙らない者はいない。

【語注】（174～179行）

174三千世界　三千大千世界の略。古代インドの世界観による全宇宙。

174某（釈）仏　「某仏」の傍の「尺」は、釈迦牟尼仏の「釈」の略字。釈迦牟尼仏（釈尊）は、唯一、人間としてこの世界に生まれた仏とされている。

174无為　因果関係を離れ、生滅変化を越えた絶対的な存在。

174有為　因果関係によってつくられた無常の存在。

174四生　108行「四生」語注参照。

175誘（古シラ）ヘテ　「誘」は仏典語、教え導くこと。「誘（古シラ）フ」は古訓点資料に例がみえる。「群迷を誘（ラシ）へ進（ス、）メて」（西大寺本『金光明最勝王経』巻第三、平安初期点）。「誘誨（上音畏古之良布下音化訓教也）」（小川本『新訳華厳経音義私記』下巻）。

175我（ア）ガ財ハ　中田書に以下のように述べられている。「「ア」と「ワ」とには、それぞれに係かる後に相違があるといい、アガ君・アガ児・アガ恋などとなり、ワガ大君・ワガ母などとなる。ところで「タカラ」は上代文献

にていずれを受けるか例がないが、この文がその確実な用例を示すものである。なお、「ア」と自称したのは、「仏」であることが、特異な例となる」（二二一頁）。

178骨ヲ砕キ　恩が大きく報い難いことを述べる。75～76行にも類似の表現がみえる。「薄キヲ解キ、甘キヲ推シ、頭ヨリ踵ニ至ルマデ摩デタマヒシ恩ハ、丘山ヨリモ重ク、沢（仁）ハ江海ヨリモ深シ。身ヲ屈メ骨髄ヲ砕クトモ何ニシテカ酬イタテマツラム。」（75～76行）。

178一リガ　317行に「孤ヒト」の例がある。

178須弥山　仏教の宇宙観において、世界の中心にそびえたつ巨大な山。

179四大海　須弥山の四方にある大海。

【翻刻】（180～184行）

180　至寺思惟方　是此善人住処　我何時ニカ棄世俗家住セム如来家　依是カク思惟ルニ

181　自然得出家功徳云　人身力強壮時ニハ謗僧　瑕キス疵ツ、ミ附身時ニハ妻子モ不扶衣タス

182　僧ハ着カキツキテ昼モ夜モ不避　看病　読経　乞誓　砕身力ヲ　竭心魂ヲ　不寝イモネ　守扶

183　不礙雨風ニモ　策杖　着ハキ　山藁沓云々㉔→不物ヲ己親族　不トモ己妻子　故不悋アナ僧ナ

184　↑㉔妻子モ何救地獄　眷属モ何引浄土　僧己ソ乞度　救ヒ地獄モ　令生天ニモ令生ムレ浄土ニモ

【読み下し文】（180～184行）

寺ニ至リテ思惟スル方ハ、是レハ此レ善キ人ノ住ム処ナリ。我、何レノ時ニカ世俗ノ家ヲ棄テテ、如来ノ家ニ住セム。是ク思惟スルニ依リテ、自然ニ出家ノ功徳ヲ得云。

人、身力ノ強ク壮ナル時ニハ、僧ヲ謗ル。瑕疵（キズツミ）身ニ附ク時ニハ、妻子モ衣扶（エタス）ケズ。僧ハ着（カキツ）キテ昼モ夜モ避ラズシテ、病ヲ看ル。経ヲ読ミ、乞ヒ誓ミ、身力ヲ砕キテ心魂ヲ竭シ、寝（イモネ）ズシテ守リ扶ク。雨風ニモ礙（サ）ヘラレズ、杖ヲ策キ、山藁沓ヲ着（ハ）キ云々。

（㉔己ガ親族ニアラヌモノヲ、己カ妻子ニアラヌトモ。故ニ僧ナ悛（アナヅ）リ。）

妻子モ何ニシテカ地獄ヨリ救ハム。眷屬モ何ニシテカ浄土ニ引カム。僧己ソ乞度、地獄モ救ヒ、天ニモ生レ令メ、浄土ニモ生レ令ムレ。

【解説】（180～184行）

▽180～184行　寺と僧を讃嘆する。僧は、病気のときは献身的に看病をし、地獄からも救ってくれる家族以上の存在であると、僧の恩について述べる。人々の病気の治療や看病が僧の主な仕事の一つであったことがうかがわれる。仮名書きが多く、訓点にはあまりみられない和文的な表現が多い。

【文意】（180～184行）

寺に来て思うことには、ここは善き人の住処である。私は、一体いつ世俗の家を捨てて、如来の家に住むのだろうか。このように思うので、自然に出家の功徳を得ることができる云。

人は身体が力強く若々しい時には、僧を悪く言う。しかし身体が傷つき病む時には、妻子も助けてくれることができない。僧は病人の傍に付き添って昼も夜も離れずに看病をする。経を読み、祈祷をし、身力を砕いて心魂を尽くして、寝もせずに守り助けてくれる。雨風にもさえぎられず、杖を策いて、山藁沓を履いて云々。

（㉔自分の親族でもないのに、自分の妻子でもないのに僧は自分を助けてくれる。故に、僧を決して侮ってはいけない。）

妻子でもどうやって地獄から救ってくれるだろうか。親族でもどうやって浄土に連れて行ってくれるだろうか。僧こそがきっと、地獄からも救い、天にも生まれさせ、浄土にも生まれさせてくれるだろう。

【語注】（180～184行）

180是ク（カ）　358行に「是カクナモ」の例がある。

181瑕疵（キズツミ）　怪我や病気。「疵」は病気、きず。「つつみ」は病気や差しさわりのことで、『萬葉集』に「つつみなく幸（さき）くいます」という表現が二例みられる。「恙無福（つつみなくさき）くいまさば」（柿本朝臣人麻呂歌集、巻第十三、三二五三）、「都々美（つつみ）無久幸（なくさき）くいまして」（山上憶良「好去好来歌」、巻第五、八九四）。

181衣扶（エタス）ケズ　原文「エ（衣）」はア行のエで、本書ではこの一例のみ。ヤ行のエ（江）と区別して用いられている。不能表現について築島（小考）に「訓点では「…コトエズ」「…アタハズ」等であって、「エ…ズ」はないが、本書には用いられている」とある。

182着（カキツキ）キテ　本書では「着」の読み仮名はこの「カキツキテ」と、次行の「ハキ」（183行）の二例である。

182乞ヒ誓ミ　72行にも「乞誓（乞ヒ誓メドモ）」の例がある。72行語注参照。

182寝（イモネ）ズシテ　「寝（い）」（名詞）は通常、助詞「の」「を」「も」などを介して動詞「寝（ぬ）」がくる形を取る。係助詞「も」を取る時は否定の意が加わることが多い。「妹を思ひ伊能祢良延奴尓（いのねらえぬに）秋の野にさ雄鹿鳴きつ妻思ひかねて」（『万葉集』巻第十五、三六七八）。「…モ…ズ」は訓点にみえず、和文的な語法と思われる。127行「収メズ」語注参照。

183山藁沓ヲ着キ　僧が薬草を求めて山を歩き回ることか。

183ナ悛（アナヅ）リ　「ナ…」「ナ…ソ」の例は、207行にも「不行殺ナ（殺ナ行ヒ）」、「不ッ誹人ナ（人ナ誹リソ）」「行ナ不為（行ヒヲナ為（セ））」の三例がある。「禁止表現は訓点では「…コトナカレ」「マタ…コト」等で「ナ…」「ナ…ソ」は殆どないのであるが、本書には後者の数例がある」（築島「小考」）。

【翻刻】（185～189行）

185　何故某仏（尺）久出三界火宅　然反入三界囹　維摩詰現病相（久離八苦然物ヲ）　観世菩薩過去仏（成）　然更作菩薩　地蔵

186　菩薩在地獄（久離地獄然物ヲ反）何耶　「一切衆生未脱三界囹　是故　仏入三界囹一切衆生出三界囹仏モ

187　出給ヒナム三界囹　一切衆生病スル故□菩薩為病　一切衆生病止ナハ　菩薩モ病止ナム　一切衆生

188　不成仏ト故大悲菩薩不成仏　一切衆生成ナハ仏菩薩モ成（給）ナム　仏　一切衆生囚（地獄ニ）モレルカ故

189　菩薩モ在地獄ニ　一切衆生出ナハ地獄菩薩モ出（給）ナム　地獄（ハ）云

【読み下し文】（185～189行）

何ガ故ニゾ。某（釈）仏ハ久シク三界ノ火宅ヲ出デタマフ。然ルモノヲ反リテ三界ノ囹ニ入リタマフ。維摩詰ハ。久シク八苦ヲ離ル。然ル物ヲ病相ヲ現ハス。観世菩薩ハ過去ニ仏ト成ル。然ルモノヲ更ニ菩薩ト作ル。地蔵菩薩ハ久シク地獄ヲ離ル。然ル物ヲ反リテ地獄ニ在ルハ何ゾヤ。

「一切衆生ハ三界ノ囹ヲ未ダ脱レズ。是ノ故ニ、仏、三界ノ囹ニ入リ給フ。一切衆生、三界ノ囹ヲ出ヅレバ、仏モ三界ノ囹ヲ出デ給ヒナム。一切衆生、病スルガ故ニ、□菩薩、病ヲス。一切衆生、病止ミナバ、菩薩モ病止ミタマヒナム。一切衆生、仏ト成ラヌガ故ニ、大悲ノ菩薩モ仏ト成リタマハズ。一切衆生、仏ト成リナバ、菩薩モ仏ト成リ給ヒナム。一切衆生、地獄ニ囚（ひと）レルガ故ニ、菩薩モ地獄ニ在ス。一切衆生、地獄ヲ出デナバ、菩薩モ地獄ヲバ出テ給ヒナム云。

【解説】（185～189行）

▽185～189行　185行から186行の「何耶」の下の鉤点まで、縦線で抹消されている。その後の「一切衆生未脱三界囹是故」も縦線で抹消された形跡があり、その横に抹消を取り消す意味と思われる「生」の字が書いてある。その下に、擦消された形跡のある鉤点が見える。

187行「病スル故」の下一文字が擦消されている。

185行から186行の抹消された部分が「何故～」という問で、鉤点の後がその答となり、問答の形になっている。「仏・維摩詰・観世音菩薩・地蔵菩薩は、過去に成仏しながら、なぜこの三界に戻ってきたのか」という

問に対して、「仏や菩薩は、衆生のために再びこの世に戻ってきたのである」と答える。一切衆生を救度し、その時こそともに成仏しようという、菩薩の四弘誓願（→379行）の第一、衆生無辺誓願度（一切衆生を悟りの彼岸に渡そうという誓い）にあたる。

【文意】（185～189行）

何故なのだろうか。某（釈迦牟尼）仏は（覚りをひらいて）永久に三界の火宅を出られたのに、またこの世界にお戻りになって三界の牢獄にお入りになったのだろうか。維摩詰は永久に八苦を離れたのに、再び八苦の一つである病にかかられたのか。観世音菩薩は過去世に仏と成られたのに、また菩薩となって戻っていらしたのか。地蔵菩薩は永久に地獄をお出になったのに、また地獄にお戻りになったのは、いったいどうしてなのだろうか。

一切衆生は三界の牢獄をまだ脱け出ずにいる。そのために、仏はまた三界の牢獄にお入りになったのである。一切衆生が三界の牢獄を出れば、仏も三界の牢獄をお出になられる。一切衆生が病の苦しみを受けているために、維摩菩薩は病になられた。一切衆生の病がなくなれば、菩薩の病もお止みになる。一切衆生が成仏しないので、大悲の菩薩も成仏なさらない。一切衆生が成仏すれば、仏菩薩も仏にお成りになるだろう。一切衆生が地獄にこもっているので、菩薩も地獄にいらっしゃる。一切衆生が地獄を出るならば、菩薩もお出になるだろう[云]。

【語注】（185～189行）

185三界ノ火宅　衆生が住む迷いと苦しみの三界（欲界・色界・無色界）を、火が燃えさかる家にたとえている。

法華七喩の一つ（『法華経』巻第二、譬喩品）。

185維摩詰　釈尊在世の毘耶離城の在家の資産家。病床に訪れた諸比丘諸菩薩に、大乗の教理を説いたとされる（『維摩詰所説経』）。

185観世菩薩　観世音菩薩。衆生の為に三十三身に変化してこの世に現れるという（『法華経』巻第八、観世音菩薩普門品）。

185地蔵菩薩　六道を巡って衆生を救済するとされ、特に地獄の救済者とされている。

【翻刻】（190～200行）

190 浄土ト穢土トノ隔ヘタ、リ何　有三毒之人ノ所ヲハ居名穢土无キ三毒之人所居名

191 浄土ト　断テル煩悩　所知二障之人ノ得(給)タル躰ヲハ名仏又如来　具煩悩所知

192 二障之人ノ得躰ヲハ名凡夫　此地ハ盧舎那如来ノ蓮華蔵世界ナリ　我等カ

193 造下劣之業故(所感)　山高谷深　瓦礫荊藪雑穢充満ト見タリ　㉕→此世界ハ人情了戻

194 曲リ諂ヘツラヒ妄イツ欺アサ　他人ニハ与小与悪　自取大取吉ヲ　隠己短　露他短顕

195 己能　隠他能　自濁テ憎他濁　自ハ曲テ厭他曲ヲ　故此世界ハ道路曲　水旱不

196 就毒虫毒獣　飢饉　刀兵　非時災　万事不如意

197 ↑㉕人ハ造中容業　故此世界ヲ　見山河草木水　餓鬼造下劣業　故此世界ヲ見火村

198 地獄衆生ハ造最下劣業　故此世界ヲ見鈍山刀林　㉖→灰河猛火村←㉖　天造上品業　故此世

199　界ヲ見瑠璃地　㉗↓寶樹寶池↑㉗　菩薩造上々品業　故此世界ヲ見　以百千種珎ニ所成七

200　寶浄土云　㉘↓切利天　地踏入三寸挙足如本　石柔如綿　此国石堅杌堅触ツキアッレハ損物天上不ニ

↑㉘　此国見地獄者紀国有文寺佃人子走其寺田之稲茎作刀云又冥報記霊異記云々

【読み下し文】（190～200行）

浄土ト穢土トノ隔（ヘダ）リハ何ゾ。三毒有ル人ノ居ル所ヲバ、穢土ト名ヅク。三毒无キ人ノ居ル所ヲハ浄土ト名ヅク。煩悩所知ノ二障ヲ断テル人ノ得給ヒタル躰ヲバ、仏又如来ト名ヅク。煩悩所知ノ二障ヲ具セル人ノ得タル躰ヲバ、凡夫ト名ヅク。

此ノ地ハ盧舎那如来ノ蓮華蔵世界ナリ。我等ガ造レル下劣ノ業ノ感ズル所ノ故ニ、山高ク谷深ク、瓦礫、荊藪、雑穢ノ充チ満ツト見エタリ。（㉕此ノ世界ハ人ノ情了戻（リョウレイ）ニシテ、曲リ諂（ヘツラ）ヒ妄（イツハ）リ欺（アサム）キ、他人ニハ小ヲ与ヘ悪ヲ与ヘ、自ラハ大ヲ取リ吉ヲ取ル。己ノ短ヲ隠シ、他ノ短ヲ露ス。己ノ能ヲ顕シ、他ノ能ヲ隠ス。自ラハ濁リテ、他ノ濁リヲ憎ム。自ラハ曲リテ、他ノ曲ルヲ猒フ。故ニ此ノ世界ハ、道路曲リ、水旱（カ）レテ、就（ナ）ラズ。毒虫、毒獣、飢饉、刀兵。非時ノ災アリテ　万事不如意ナリ。）

人ハ中容ノ業ヲ造ル。故ニ此ノ世界ヲ、山、河、草、木、水ト見ル。餓鬼ハ下劣ノ業ヲ造ル。故ニ此ノ世界ヲ火村（ホムラ）ト見ル。地獄ノ衆生ハ最下劣ノ業ヲ造ル。故ニ此ノ世界ヲ剱ノ山、刀ノ林（㉖灰ノ河、猛キ火村）ト見ル。天ハ上品ノ業ヲ造リ、故ニ此ノ世界ヲ瑠璃ノ地（㉗寶ノ樹、寶ノ池）ト見ル。菩薩ハ上々品業ヲ造ル。故ニ此ノ世界ヲ、百千種ノ珎ニ以（ヨ）リテ成ゼラレタル七寶浄土ト見ル云。

㉘ 忉利天ハ、地ニ三寸踏ミ入レテ、足ヲ挙グルコト本ノ如シ。石ノ柔キコト綿ノ如シ。此ノ国ハ石堅ク杌堅クシテ、触ツレバ物ヲ損フ。天上ニアラズ。）

此ノ国ヲ地獄ト見ルハ、紀国ニ文有リ。寺ノ佃人ノ子、其ノ寺ノ田ヲ走リ、稲茎ノ刀ト作ル、ト云フ。又冥報記霊異記云々。

【解説】（190～200行）

▽190～200行　浄土と穢土の違いについての問答。この世界は心に応じて浄土にも穢土にも変現するという思想（心浄土浄）が述べられている。「煩悩所知二障」の唯識の用語が使用されているため、唯識思想の「変化土」の思想を基調とするものと思われる。変化土とは、仏の三身（または四身）のうちの変化身が、衆生に合わせて、仏土を浄土や穢土に化為すること（「三身」35行語注参照）。拙稿「『東大寺諷誦文稿』の浄土」（『成城文芸』第二一九号、二〇一二年三月）参照。

190行、197行、200行に鉤点があり、三段に分かれている。第一段、浄土と穢土との隔たりをたずねる問に対して、煩悩（三毒・煩悩所知二障）の有無であると答える。此の地は盧舎那如来の蓮華蔵世界であるが、我々の下劣の業の故に、この世界には雑穢が充満して見えているという。第二段、人の中容の世界、餓鬼の下劣の世界、地獄の最下劣の世界、天の上品の世界、菩薩の上々品の世界について述べる。㉘の連絡線で200行左行間の「此ノ国ニ地獄ヲ見シ者」の一行がつなげられている。第三段は200行、忉利天の様子について述べる。

【文意】（190～200行）

浄土と穢土との違いは何であろうか。

三毒の煩悩におかされている者が住むところを、穢土と名づけるのである。三毒のない者が住むところを、浄土と名づけるのである。煩悩所知の二障を断ちきった者が得られた身体を、仏また如来と名づける。煩悩所知の二障をそなえる者が得た身体を、凡夫と名づける。

此の地は盧舎那如来の蓮華蔵世界である。しかし、我々が造った下劣の業に感応しているために、この世界は山高く谷深く、瓦礫、荊藪、雑穢が充満していると見えるのである。（㉕この世界は人の情がひねくれ曲り、へつらい、偽り欺き、他人には小を与え悪を与え、自分は大を取り吉を取る。自分の短所をかくし、他人の短所をさらす。自分の能力を自慢し、他人の能力をかくす。自分は濁りながら、他人の濁りを憎む。自分は曲っていながら、他人の曲っているのを嫌う。そのためにこの世界は、道路が曲り、水は枯れて実らない。毒虫、毒獣、飢饉、刀兵など時にあらぬ災難や災害があり、万事思い通りにいかない。）

人は中容の業を造る。そのためにこの世界を、山、河、草、木、水と見る。餓鬼は下劣の業を造る。そのためにこの世界を火炎の世界に見る。地獄の衆生は最下劣の業を造る。そのためにこの世界を、剣の山、刀の林（㉖灰の河、燃え盛る火炎）と見る。天は上品の業を造り、そのためにこの世界を瑠璃の地（㉗寶の樹、寶の池）と見る。菩薩は上々品の業を造る。そのためにこの世界を、百千種の宝によって作り上げられた七寶浄土と見る云。

（㉘忉利天では、地面に三寸踏み込んで足を上げると元通りになる。石の柔らかいことは真綿のようである。この世界は石が堅く切り株も堅く、つまづくと物が壊れる。天上の世界でそのようなことはない。）

此の国を地獄と見ることについて、紀伊国に文章がある。寺の田の農夫の子が、その寺の田の稲の茎がみな刀になって田の中を走り回ったという。また、『冥報記』『霊異記』にいう云々。

【語注】（190～200行）

190三毒　貪（むさぼり）・瞋（いかり）・癡（おろかさ）の三つの煩悩。

191煩悩所知ノ二障　悟りを得るための障りとなる煩悩と、諸法の実相を知るための障りになる無智の、二つの障りのこと。唯識の思想。『大乗法苑義林章』に「分別の煩悩及び所知障未だ尽き」ない者のための「変化土」についての言及がある。「初の三身の土は唯だ浄にして穢に非ず。後の変化土は浄及び穢に通ず。十地の菩薩の為めに、身及び土を現ずるは穢に非ず。唯だ浄なり。地前の菩薩と二乗衆との為めに現ずるは浄及び穢に通ず、若し分別の煩悩及び所知障未だ尽きず、未だ二空真如を証せざる者の為めに現ずる所の身土は或は浄、或は穢なり。若し二の分別障尽きたると及び已に二空を証する者のために現ずる所の身土は必ず是れ浄なるが故に」（『大乗法苑義林章』巻第七之末）。

192盧舎那如来　毘盧舎那仏とも。蓮華蔵世界の教主。密教では大日如来と称される。法相宗の三身説では毘盧舎那仏を法身（自性身）、盧舎那仏を受用身、釈迦牟尼仏を変化身（化身）とする。350行・387行参照。

192蓮華蔵世界　毘盧舎那仏が創出した世界。「此の華蔵荘厳の世界海は是れ毗盧舎那如来往昔に世界海微塵数の劫に於て菩薩の行を修せし時、一一の劫の中に世界海微塵数の仏に親近して、一一の仏の所にて浄く世界海微塵数の大願を修して厳浄せし所なり」（新訳『大方広仏華厳経』巻第八、華蔵世界品）。

193瓦礫、荊藪、雑穢　『維摩経』の心浄土浄を説いている箇所に類似の表現がある。「舎利弗言く、「我れ此の土を見るに、丘陵・坑坎・荊棘・沙礫・土石・諸山・穢悪もて充満されたり」と。螺髻梵言く、「仁者心に高下有りて仏の慧に依らざるが故に、此の土を見て不浄たりと為すのみ。舎利弗、菩薩は一切衆生に於て悉く皆平等にして、深心清浄なり、仏の智慧に依れば、即ち能く此の仏土の清浄なるを見るべし」と」（『維摩詰所説経』巻上）。

193了戻（リョウレイ）　物が曲りくねっているさま。

194妄リ（イツハ）　72行にも「虚（イツ）」の読み仮名の例が見られる。72行語注参照。

199七寶浄土　七宝で荘厳された浄土。七宝については35行、63行語注参照。

200地ニ三寸踏ミ入レテ　経典に、浄土や天の描写に地面が柔軟であるとする表現がしばしば見られる。「其の地の柔軟なること譬へば天衣の如し。行く時に足下に踏み入ること四寸、足を挙ぐれば復還れり」（『悲華経』巻第四）。

200紀国　中田書ではこの書入れを一行に数えていたが、行間の書入れとする『総索引』にしたがう。読み下し文、及び、「この国を地獄と見」た現報説話とする解釈は出雲路修氏による（「日本霊異記」、『岩波講座日本文学と仏教』第二巻「因果」第二部第一章、一九九四年）。寺の農夫の子に稲の茎が刀に見えたのは、「此ノ世界ヲ釼ノ山、刀ノ林ト見ル」（198行）の類想である。『日本霊異記』には田の稲穂が地獄の炎に見えて走り回った男の説話がある（中巻「常に鳥の卵を煮て食ひて現（うつつ）に悪しき死の報を得る縁」第十）。

200冥報記霊異記　『冥報記』は唐の永徽年間（六五〇～六五五）に唐臨が編纂した仏教説話集。『霊異記』は、

『日本国見在書目録』に「霊異記十巻」とある中国の『霊異記』か。『日本霊異記』の原撰本は延暦六年（七八七）、現存本成立が弘仁年間（八一〇～八二四）で『東大寺諷誦文稿』の成立よりも早いため、『日本霊異記』の可能性もある。

【翻刻】（201～207行）

201 約菩薩有頓悟菩薩　漸悟菩薩　約羅漢有利根羅漢鈍根羅漢　㉙→約花　有先ワセニ披サク花

202 中ナカテニ披花　後オクテニ披花　約物有疾トク就スル遅オソ就←㉙　約人　有上根中根　下根有多

203 聞多見多知　有小聞小見小知　何可知仏教　約仏教有広教略教　為上根説広教

204 為下根説略教　其略教者　聖教云　諸悪莫作　諸善奉行云　有所云　提波達多日誦㉚→

205 千偈堕无間獄ニ　須利波特日誦四字得羅漢果　故略教トシテ不可モ軽　聖徳王頌云　一目

206 之羅不能鳥得　得鳥之羅　唯是一目　聖教万差　所証理一　修行多聞　得果无二←㉚　己所不欲云々

207 殺ヲハ他所不欲故不行殺ナ誹謗ヲハ人所不欲　故不ソ誹人ナ　苦ヲハ人所不欲　故人ノ苦セム行ナ不為　悋蔑云々

【読み下し文】（201～207行）

菩薩ニ約キテハ、頓悟ノ菩薩、漸悟ノ菩薩有リ。羅漢ニ約キテハ、利根ノ羅漢、鈍根ノ羅漢有リ。（㉙花ニ約キテハ、先ニ披ク花、中ニ披ク花、後ニ披ク花有リ。物ニ約キテハ、疾ク就ルモノ、遅ク就ルモノ有リ。）人ニ約キテハ、上根、中根、下根有リ。多聞、多見、多知有リ。小聞、小見、小知有リ。其ノ下根ハ、何ゾ仏

ノ教ヲ知ル可キ。仏ノ教ニ約キテハ、広教、略教有リ。上根ノ為ニハ広教ヲ説キ、下根ノ為ニハ略教ヲ説ク。其ノ略教トイフハ、聖教ニ云ク、諸悪莫作、諸善奉行云。此ヲ能ク持チ給ハム云々。孔子ハ／良／美玉云。

（㉚有ル所ニ云、提波達多ハ日ニ千偈ヲ誦セシカトモ、无間獄ニ堕チキ。須利波特ハ日ニ四字ヲ誦セシカトモ、羅漢果ヲ得タリ。故ニ、略教ト云ヒテ軽ミス可キニモアラズ。聖徳王ノ頌ニ云ク、一目ノ羅（アミ）ハ鳥ヲ得ルニ能ハズ。鳥ヲ得ル羅ハ唯、是レ一ノ目ナリ。聖教ハ万差アレドモ、証スル所ノ理ハ一ナリ。修行、多聞ハ果ヲ得ルコト二ツ无シ。）

己レガ欲リセザル所云々。殺ヲバ、他ノ欲セザル所ナルガ故ニ、殺ナ行ヒ。誹謗ヲバ、人ノ欲セザル所ナルガ故ニ、人ナ誹リソ。苦シビヲバ、人ノ欲セザル所ナルガ故ニ、人ノ苦シビトセム行ヒヲナ為（セ）。慳蔑云々。

【解説】（201～207行）

▽201～206行　仏はそれぞれの機根に合わせて法を説くという対機説法について述べている。下根のための略教がいわゆる七仏通誡偈の「諸悪莫作、諸善奉行」であるという。

204行「有所云」から206行まで線で囲み「不」の字で抹消している。その部分は、仏の教えには万差があるが、覚りはただ一つであることを「一目の羅」の比喩を引いて述べている。

▽206行～207行　連絡線㉚の後は、殺生と誹謗、他人に苦を与えることを戒めている。

【文意】（201～207行）

菩薩には、頓悟の菩薩、漸悟の菩薩がいる。羅漢には、利根の羅漢、鈍根の羅漢がいる。(29)→花には、早生に咲く花、中ごろに咲く花、遅く咲く花がある。物には早く出来上がる物、遅く出来上がる物がある。)

人には、上根、中根、下根がいる。多聞、多見、多知がいる。小聞、小見、小知がいる。その下根の者たちは、どうやって仏の教えを知ることができるのだろうか。仏の教えには、広教、略教がある。仏は上根の者のためには広教を説いて、下根の者のためには略教を説く。その略教というのは、聖教にいう「諸悪莫作、諸善奉行」である。これをよくお守りたもちなさいますように云々。

孔子は／良／美しい玉を云。

(30)ある所に云。提波達多は日に千偈を誦したが、無間地獄に堕ちた。須利波特は日に四字だけを誦したが、羅漢果を得た。だから略教といって軽んじてはいけない。聖徳王の頌にいう。一目しかない羅(あみ)は鳥を取ることはできない。しかし鳥を捕らえる羅は、ただ一目である。聖教には万差があるけれども、証すところの理は一つである。多聞の修行者であっても、果を得ることに二つはない。)

自分が欲しないこと(をしてはいけない)云々。殺生は他の欲しないことなので、殺生を行ってはいけない。誹謗は人が欲しないことなので、人を誹ってはいけない。苦しみは人が欲しないことなので、人の苦しみとする行いをしてはいけない。悛蔑云々。

【語注】

201菩薩ニ約(オ)キテハ　「約(オ)キテハ」について、36行「如来ノ境界ニ約(オ)キテハ」語注参照。

201頓悟　頓悟はただちに悟ること。漸悟は、段階をふんで時間をかけて悟りを得ること。

201羅漢　137行語注参照。利根の羅漢、鈍根の羅漢については205行「須利波特」語注参照。

201先ニ披ク花（ワセ）「わせ」は、早く成熟する品種の稲で、後に稲以外の成長の早い種のこともいうようになった。「娘子らに行きあひの速稲（わせ）を刈る時になりにけらしも萩の花咲く」（『萬葉集』巻第十、二一一七）。

201中ニ披ク花（ナカテ）、後ニ披ク花（オクテ）「おくて」は晩生種、「なかて」は早生と晩生の中間の種。「咲く花もをそろはいとはし奥手（おくて）なる長き心になほしかずけり」（『大伴坂上女晩芽子歌一首』、『萬葉集』巻第八、一五四八）中田書に、仮名書の「オクテ」「ナカテ」の最古例であろうという指摘がある（221頁）。

202上根、中根、下根　『大乗法苑義林章』に、上根・中根・下根の説法についての記述がある。「三に彼の論に又説く、上根の人は仏菩提を取るが為に、仏宝を説く。中根の人は自然智を求め、因縁の法に達するが為に、法宝を説く。下根の人は師に依て法を受け、理・時違せざるが為に、僧宝を説くと」（巻第六之本、三宝義林）。

203広教、略教　律宗では、「諸悪莫作諸善奉行」（七仏通誡偈）など、釈迦が成道後十二年間に弟子の行法として制したものを略教とし、その後弟子に説いた広い戒律（二百五十戒）を広教とする。

204諸悪莫作、諸善奉行　七仏通誡偈（毗婆尸仏から釈迦牟尼仏までの七仏が戒行の根本とするという偈頌）。『毘尼母経』には仏が「根鈍根無所知」の諸比丘に「略説戒」を教えたとある。「諸悪莫作諸善奉行は自浄にして其の意は是れ諸仏の教なり。是を略説戒と名づく」（『毘尼母経』巻第二）。『法華文句』には人天の機とある。「音とは機なり。機に亦多種あり、人天の機、二乗の機、菩薩の機、仏機なり。人天の機とは諸悪莫作諸善奉行なり。」（『妙法華蓮華経文句』巻第十下）。

204孔子ハ／良／美玉云　「良」は抹消されている。『礼記』巻第四十八聘義篇、『孔子家語』巻第十八に、孔子が子貢に問われて玉の美点を論じている段がある。

204提波達多　釈尊の従弟で、釈尊の殺害を企んだり教道の妨害をしたために、生きながら地獄に堕ちたとされる。「提婆達多は身に三十相ありて而も其の心を忍伏すること能はず、供養の利の為の故に而も大罪を作り、生きながら地獄に入る」（『大智度論』巻第十四）。

205无間獄　無間地獄。音写は阿鼻地獄。激しい苦痛が絶え間ない地獄。八熱地獄の第八。

205須利波特　十六羅漢の一人。朱利槃特、周羅般陀、小路などともいう。聡明な兄（摩訶槃陀）は出家してすぐに羅漢果を得たが、弟の須利波特は鈍根だった。仏は弟に一の箒を与えて「取垢取垢」の言だけを念じさせたところ、たちまち羅漢果を得ることができた（『善見律毘婆沙』巻第十六）。『増一阿含経』（巻第十一）などにもみえる。

205聖徳王　不明。

205一目ノ羅（アミ）　『淮南子』（巻第十六説林訓）や『摩訶止観』などにみられる比喩で、『往生要集』巻中にも引かれている。「一目の羅は鳥を得ること能はざるも、鳥を得るは羅の一目なるのみ。（中略）すべからく広く法の網の目を施して、心行の鳥を捕ふべきのみ」（『摩訶止観』巻第五上）。

206己レガ欲リセザル所　『論語』の「己所不欲、勿施於人」（巻第六、顔淵第十二）を用いて「諸悪莫作」を説いている。

207殺　殺生は、五戒のうちの第一、不殺生戒で戒めている。

207誹謗　誹謗を戒める戒に、五戒の不妄語戒や梵網戒の不自讃毀他戒などがある。
207ナ誹リソ　「ナ…ソ」について183行「ナ悽(アナヅ)リ」語注参照。

【翻刻】（208～209行）

208 観レハ法主ノ頃日ノ事シワサヲ　起至誠心　為不坐父母言侘傺ナル念ヲ　故已トサラニ
209 費ヤツシ形ヲ　身心ヲハ作一切人ノ下ニ行法(仕)ノ事シワサ云々　以上

【読み下し文】（208～209行）

法主ノ頃日ノ事(シワザ)ヲ観レバ、至誠心ヲ起コシテ、坐サヌ父母ノ為ニ、侘傺(タテイ)ナル念ヲ言フ。故(ヒトサラ)ニ形ヲ費(ヤツ)シ、身心ヲバ一切ノ人ノ下ニ作シ、法ノ事(シワザ)ヲ行ヒ仕フト、以上。

【解説】（208～209行）

▽208～209行　法主の日ごろの亡父母への孝子ぶりを讃えている。

【文意】（208～209行）

法主の日頃の行状を観察すると、至誠心を起こして、亡くなられた父母のために、悲しみ立ちもとおる思いを述べる。喪に服してあえて身をやつし、身も心もすべての人の下に置き、法事を行い仏に仕える云々。以上。

【語注】（208～209行）

208事（シワザ）　78行「事（ワサ）ナリ」語注参照。

208故（コトサラ）ニ　348行にも同じ読み仮名がある。「故（コトサラ）ニ」（観智院本『類聚名義抄』僧中五四）。

【翻刻】（210行）

210 誓通用 値无慈之祖人ハ作手折足折トモ値耶見ナル父母ニ人ハ投弃道路

【読み下し文】（210行）

210 誓通用 慈シヒ无キ祖（オヤ）ニ値ヘル人ハ、手折レ足折レトモ作リ、邪見ナル父母ニ値フ人ハ道路ニ投ケ弃（ス）テラル。

【解説】（210行）

▽210行　標題「誓通用」。無慈悲な親について述べており、次の211行以降の章段と対比的な内容。線で囲んで抹消している。

【文意】（210行）

誓通用 無慈悲な親のもとに生まれた人は、手折れ足折れにもなり、邪見な父母のもとに生まれた人は、道路に投げ捨

てられる。

【語注】（210行）

210　邪　原文は「耶」

【翻刻】（211～227行）

211　思惟（誓詞通用）我父母ヲ忍ヒ寒テヲ忍（給）ヒ熱　代テ我等ニ受苦目ヲ　朝夕ニハ奉令

212　聞哭音（叫サケ）ヲ耳　煮砕上タリ御胸情ヲ耳　如ク吉キ人思ホシテ我等ヲ　不大臣云　不后云

213　不太子云　不仏云　申セハ寒ト脱テ給ヒシ　㉛→父公ハ　我ハ不トモ着而着セムトソ宣ケル我子ニヲ

214　↑㉛　申セハ飢ヤワ分ワケテ給ヒシ　㉜→母氏ハ　我ハ不トモ食而給トソ宣ケル我子ニヲ↑㉜　父公カ摩給ヒシ（ヒタリ）

215　頭ハ不ネハ坐父公无摩（カキ）人モ　母氏整ツクロヒ給ヒシ儀ハ不ネハ坐母氏无整人モ　㉝→見トモ

216　見トモ不物ハ飽足　父公カ愛メクラニ念オモホセリシ御貌ナリ　聞トモ聞トモ不物ハ飽

217　母氏カ我子ト召シ、御音ナリ云　屯輪摩カ琴モ　㉞→雖麗而↑㉞　益メヤ　父公カ慈ノ麗　輪王

218　裘モ　㉟→雖↑㉟　益スキメヤ母氏カ悲厚ニ云々↑㉝　大悲ノ芳懐ヲ為昼夜之眠所大恩両膝ヲ

219　為朝夕之遊庭　含ミ慈ヲ相ヒ咲エマヒ給ヒシ紅ノ貌（ミ）ヲモ今モ見テシカモヤ　撫首ヲ

220　叩給ヒツ、背ヲ何怜ト宣ヒシ音（ミ）ヲモ今モ聞テシカモヤ　鳥獣スラ見テハ祖ヲ喜ヨロ物ヲ

221　不シテ奉覲父君成ケル久ソ　不シテ奉聞母氏ヲ歴ケル年月ソ　㊱→雨々吹

222 風之時ニモ坐セハ父君シ不思物モ　露霜置キ↑㊱ 可坐彩ク団(陀ニ)鑾リニノ紅貌(ミ)ハ

223 由テソ吾曹ニ成(給ヒタル)麻影ニ　可坐安ニ柔軟ノ玉胸(ミ)ハ由テソ我等ニ成(給タル)

224 干カラ山ニ ㊲↓霜(シモノアカトキノ)暁雪夕ニハ坐セハ父公シ不念物モ　降(フリ)雨吹風時ニモ坐セハ母氏シ

225 无憂モ↑㊲ 万ノ物ノ子雖愛ツミカタシト父公ハ不宣愛ツミカタシトモ无キ一ノ利モ子友

226 等ヲ己ソ宣ケレ愛トハ　千ノ珎雖有母氏ハ不宣珎トモ愚(オ)癡(カ)ナル子友等ヲ己ソ

227 宣ケレ珎トハ云々

【読み下し文】（211～227行）

誓詞通用

「我ガ父母ヲ思惟(オモヒ)ミレバ、寒(イテ)ヲ忍ビ、熱キヲ忍ビ給ヒ、我等ニ代リテ苦シキ目ヲ受ケ、朝夕ニハ哭キ叫(サケ)ブ音ヲノミ聞カ令メ奉リ、御胸情ヲノミ煮砕キタテマツタリ。吉キ人ノ如ク我等ヲ思ホシテ、大臣ナラズ云。后ナラズ云。太子ナラズ云。仏ナラズ云。寒シト申セバ脱ギテ給ヒシ（㉛父公ハ、我ハ着ズトモ我子ニヲ着セムトゾノタマヒケル。）飢(ヤワ)シト申セバ分(ワ)ケテ給ヒシ／ヒタリシ／（㉜母氏ハ、我ハ食ハズトモ我子ニヲ給ハムトゾノタマヒケル。）父公ガ摩(カ)キ給ヒシ頭ハ、父公坐サネバ摩(カ)キ（給フ）人モ无シ。母氏ガ整(ツクロ)ヒ給ヒシ儀ハ、母氏坐サネバ、整フ人モ无シ。【㉝見レドモ見レドモ飽キ足ラハヌモノハ、父公ガ愛(メグラ)ニ念(オモ)ホセリシ御貌(ミカホ)ナリ。聞ケドモ聞ケドモ飽カヌモノハ、母氏ガ我ガ子ト召シシ御音ナリ云。屯輪摩ガ琴モ（㉞麗シト雖モ）、父公ガ慈シビノ麗シキニ益ギメヤ。輪王ノ裘モ（㉟雖モ）母氏ガ悲シビノ厚キニ益(ス)ギメヤ云々。】大悲ノ芳シキ懐ヲ昼夜ノ眠ル所トシ、大恩ノ

両ノ膝ヲ朝夕ノ遊ビノ庭トセリ。慈シビヲ含ミテ相ヒ咲ヒタマヒシ紅ノ貌ヲモ、今モ見テシカモヤ。首ヲ撫デ背ヲ叩キ給ヒツツ、怜シトノタマヒシ音ヲモ、今モ聞キテシカモヤ。鳥獣スラ祖ヲ見テハ喜ブル物ヲ、父君ヲ覲奉ラズシテ久シクゾ成リケル。母氏ヲ聞キ奉ラズシテ、年月ソ歴ケル。(36)雨々リ風吹ク時ニモ、父君シ坐セバ物モ思ハズ、露霜置キ、）彩シク坐ス可キ団鬘ノ紅ノ貌ハ、吾ガ曹ニ由リテゾ麻影ニ成リタマヒタル。安ラカニ坐スベキ柔軟ノ玉ノ胸ハ、我等ニ由リテゾ干山ニ成リタマヒタル。(37)霜ノ暁、雪ノ夕ニハ、父公シ坐セバ物モ念ハズ、雨降リ風吹ク時ニモ、母氏シ坐セバ憂ヘモ无シ。）万ノ物ノ子、愛ツミカタシト雖モ、父公ハ愛ツミカタシトモ宣ハズ。一ノ利モ无キ子ドモ等ヲコソ愛シトハ宣ヒケレ。千ノ珎有リト雖モ、母氏ハ珎トモ宣ハズ。愚ニ癡ナル子ドモ等ヲコソ珎トハ宣ヒケレ云々。

【解説】（211～227行）

▽211～227行　標題「誓詞通用」。父母の恩を述べる。『大乗本生心地観経』（巻第二、三、報恩品）に類似する箇所が多いため、その翻案であろうと思われる。「ケリ」を多用するなど、和文的要素の多い文体である。『大乗本生心地観経』は唐元和五年（弘仁元年、八一〇）の漢訳であるため、『東大寺諷誦文稿』のこの文章はそれ以降の成立ということになる（拙稿「東大寺諷誦文稿の成立年代について」、『国語国文』第六十巻第九号、一九九一年九月）。『大乗本生心地観経』は四恩説（父母・国王・衆生・三宝）を説く経典として有名である。本書はそれを取り入れた最も早い例である可能性がある。

【文意】（211～227行）

誓詞通用

我が父母を思いかえしてみると、冬の凍える寒さを耐え、夏の暑さをお忍びになり、私たちの代わりに辛く苦しい目を受けてくださった。朝夕には子どもたちの泣き叫ぶ声だけをお聞かせ申し上げて、お心ばかり煮え砕けさせ申し上げた。私たちのことをまるで素晴らしい人間のようにお思いになって、（大臣ではないのに云。后ではないのに云。太子ではないのに云。仏ではないのに云。）私たちが寒いと言えば、ご自分の衣を脱いで着せてくださる（㉛父公は、ご自分は着なくてもわが子には着せようとおっしゃる。）お腹が空いたと言えば分けてくださる／くださった／（㉜母氏は、自分は食べなくても我が子には食べさせようとおっしゃる。）父公がかきなでてくださった頭は、父公がいらっしゃらないのでかきなでてくださる方もいない。母氏が整えてくださった身なりは、母氏がいらっしゃらないので、整えてくださる方もいない。【㉝見ても見ても、見飽きないものは、父公が私をいとおしく思ってくださったお顔である。聞いても聞いても、聞き飽きないものは、母氏が我が子とお呼びになったお声である。屯輪摩の琴の音も（㉞麗しいといえども）、父公の慈愛の麗しさにかなうことがあるだろうか。転輪聖王の皮衣も（㉟いえども）、母氏の愛情の厚さにかなうことがあるだろうか云々。】慈しみ深く芳しいふところを昼夜の寝床として、恵み深い両つ（ふた）の膝を朝夕の遊びの庭とし、お互いに微笑みあった若々しいお顔を、今も見たい。首をなで背中を叩いてくださりながら、楽しいねとおっしゃったお声を、今も聞きたい。鳥獣でさえ親を見ては喜ぶのに、父君にお会いできなくなって長い時が経ってしまった。母氏のお声をお聞きしなくなって、長い年月が経ってしまった。（㊱雨降り風が吹く時にも、父君がいらっしゃれば物を思うことはない。

露霜が置いて）美しくふくよかな紅のお顔は、私たち兄弟のために朝影のように細くおやせになってしまった。安らかでやわらかいお胸は、私たちのために枯れ山のようになってしまった。（㊲寒い霜の暁、雪の夕べにも、父公がいらっしゃれば物思いもしない。雨降り風が吹くときにも、母氏がいらっしゃれば何の憂いもない。）あらゆる動物の子どもは手がかかって可愛がりにくいというのに、父公はそんなことはおっしゃらない。何の得にもならない子どもたちをこそ可愛いとおっしゃってくださる。千の宝があるといっても、母氏は宝ともおっしゃらない。おろかな子どもたちをこそ、宝だとおっしゃるのである云々。

【語注】（211～227行）

214寒シト申セバ　75～76行にも類似の文がある。『心地観経』報恩品「母上味を得れば先づ其の子に与へ、珍妙の衣服も亦復是の如し」（巻第二）、「飲食も湯薬も妙なる衣服も、子を先にして母後なるを常則と為す」（巻第三）にもとづく表現と思われる。

214飢（ヤワ）シト申セバ　128行にも「饑ャワ（ヤワキヲ）」がみえる。

214母氏　100行「母氏」語注参照。

215整（ツクロ）ヒ給ヒシ　「整ツクロフ」（観智院本『類聚名義抄』僧下一〇四）。

215見レドモ見レドモ　「容顔を顧視して厭き足ること無く」（『心地観経』巻第三）に類似している。

216愛（メグラ）ニ　「めぐし」「めぐみ」の「めぐ」と同根の語であろう。

217屯輪摩ガ琴　『大智度論』に「屯崙摩甄陀羅王・揵闥婆王の如きは、仏の所に至り、琴を弾じて仏を賛じ、

三千世界皆為に震動し、乃至摩訶迦も其坐に安ぜざりき」（巻第十）、「声聞の如きは、緊陀羅王・屯崙摩が琴を弾じて歌声し、諸法実相をもって仏を讃ずるを聞く」（巻第十七）とある。

217輪王ノ裘　輪王は転輪聖王。「裘（かわごろも）」は毛皮で作った衣。転輪聖王は七宝（金輪・白象・紺馬・神珠・玉女・居士・主兵）を成就するといわれ、『大薩遮尼乾子経所説経』は、その他にまた七つの軟宝（剣・皮・床・園・舎・衣・足所用）があるとする。その中の「皮宝」は海龍王の皮で、広大で寒熱をさえぎり王に従って移動するもの、「衣宝」は柔軟で汚れず、寒熱・餓渇・病瘦・悩疲を防ぐというもの。

218大悲ノ芳懐ヲ　「遊ビノ庭トシ」まで、「母の胸憶を以て而も寝処と為し、左右の膝上常に遊履を為す」（『心地観経』巻第二）に類似している。

219貌（ミカホ）ヲモ　または「ミカタチ」か。敬語「ミ」について86行語注参照。

222父君シ　「父君シ」は、名詞に助詞「シ」ついた例。224行の「父公シ」「母氏シ」も同様。助詞「シ」について25行語注参照。

222団鬘（ダニリニ）　「ダニリニ（陀尓リ尓）」は本書唯一の字音表記。「陀」は濁音仮名、「ニ（尓）」は韻尾にiを付けた読み方の仮名。

223麻影（アサカゲ）　「あさかげ（朝影）」は明け方の薄明のことで、それによってできる淡く細長い影。やせ細った姿をいう。『萬葉集』に六例見える。「朝影に我が身はなりぬ玉かきるほのかに見えて去にし子ゆゑに」（巻第十一、二三九四）など。

224干山（カラヤマ）ニ　枯れた山に。「其の泣く状（なく）は、青山は枯山（からやま）如（な）す泣き枯らし」（『古事記』上巻）。

224霜ノ暁（アカトキ）「アカトキ」は「あかつき」の古形。「妹を思ひ眠の寝らえぬに安可等吉能朝霧隠（ごも）り雁がねそ鳴く」（『萬葉集』巻第十五、三六六五）

225愛（ム）ツミガタシトモ　本書の読み仮名の書き方に従えば、「ツミガタシ」と訓むことになるが、中田は「ムツム」「ムツミカタシ」と仮名を補って訓み下している。「補うのでなければ、この語も他に見えないものとなる」と指摘している（中田239頁）。

225千ノ珎有リト雖モ　「猶し貧女の如意珠を得たるが如く」（『心地観経』巻第二）、「若し平復を得て身安楽となれば、貧の宝を獲しが如く喜は量り難し」（同、巻第三）に類似している。

226愚（オロカ）ニ癡（カタクナ）ナル　仏典語「愚癡」を訓読している。

【翻刻】（228行）

228　百石云　八十石云　乳房之恩未報一モ上　三千六百日之内守長之恩、未究上

【読み下し文】（228行）

百石云。八十石云。乳房ノ恩、一モ報イタテマツラズ。三千六百日ノ内ニ長キヲ守リタマヒシ恩、都テ究メタテマツラズ。

【解説】（228行）

▽228行　前半部は百石讃嘆「ももさくにやそさくそへてたまへてしちぶさのむくいけふせすはいつかわがせんとしはをつさよはへにつつ」（『三宝絵』下、灌仏）に類似するが、本書のこの部分が直接関係があるかどうかは不明である。『中陰経』や『大乗本生心地観経』に出典がもとめられる。傍書の「一モ」と「都」は囲み線で抹消されている。

【文意】（228行）

百石といい八十石という乳房の恩を、一も報い申し上げることはできない。三千六百日の長い間守ってくださった恩を、決して報い申し上げることはできない。

228百石云　百八十石の母乳について、「何が弥勒。閻浮提の児は生れて地に堕して乃ち三歳に至るまで、母の懐抱にして幾の乳を飲むことを為すや。弥勒答へて曰く、乳を飲むこと一百八十斛なり」（『中陰経』巻上）、「出胎し已るに及びて幼稚の前に、飲む所の母乳は百八十斛なり」（『心地観経』巻第二、報恩品）の例がある。

228一モ報イタテマツラズ　「一劫を経て毎日三時、自身の肉を割きて父母を養ふも、而も未だ一日の恩を報ずること能はず」（『心地観経』巻第二、報恩品）に類似している。

228三千六百日ノ内ニ　「人は十月にして生まれ、三年乳哺し、十歳の後能く出づ」（『大智度論』巻第八）による表現か。

【翻刻】（229行）

229　不奉造仏写経者　依何為報徳之由　不懸幡厳堂者何為送恩之便

【読み下し文】（229行）

仏ヲ造リ、経ヲ写シ奉ラズハ、何ニ依リテカ徳ニ報ユル由ト為サム。　幡ヲ懸ケ堂ヲ厳リ奉ラズハ、何ニ由リテカ恩ニ送ル便ト為サム。

【解説】（229行）

▽229行　報恩供養について述べている。

【文意】（229行）

仏を造り、経を写し申し上げなければ、何をして徳に報いるよすがとすることができるだろうか。幡を懸けてお堂を荘厳し申し上げなければ、何をして恩を返すたよりとすることができるだろうか。

【翻刻】（230～231行）

230　仰乞某仏　春細雨降時ニ　如万草木生長カ　下平等一味ノ法細雨　除滅无辺ノ
231　災患　世間之勝禎　出世之善キ益シルシ　成就法力ニ

【読み下し文】（230～231行）

仰ギテ某仏ヲ乞ヒタテマツラク、春ノ細キ雨ノ降ル時ニ、万ノ草木生長スルガ如ク、平等一味ノ法ノ細キ雨ヲ下ラシテ、无辺ノ災患ヲ除滅シタマヘ。世間ノ勝レタル禎（サキハヒ）、出世間ノ善キ益（シルシ）、法力ニヨリテ成就セム。

【解説】（230～231行）

▽230～231行　囲み線で抹消している。某仏に除災と利益を祈願する詞章。

【文意】（230～231行）

某仏を仰いでお願い申し上げる。春の細い雨が降る時に、万の草木が生長するように、平等一味の法の細い雨を降らせて、無限の災患を序滅してください。世間のめでたいしるし、出世間のよい利益が、法の力によって成就しますように。

【語注】（230～231行）

230平等一味　仏が機に応じて同一の教えを平等に授けることを、万物に平等に降る雨に譬える。『法華経』薬草喩品（巻第三）など、仏典に頻出する。

231勝レタル禎（サキハヒ）　「勝禎」は、めでたいしるし。